紀　　要

第 11 号

目　　次

序

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き……（瀬　口　眞　司）
－地域の検討１．湖東北部地域－

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き……（小　島　孝　修）
－地域の検討２．湖東南部地域－

櫛の造形　－縄文時代の竪櫛－……（中　川　正　人）

滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描……（田井中　洋　介）

今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例……（横　田　洋　三）

古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域……（細　川　修　平）

長浜市石田町所在の石棺について……（北　原　　治）

観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例……（辻川哲朗・山中　繁）
－蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査－

蒲生郡の渡来氏族とその文化……（大　橋　信　彌）

草津市笠山古窯出土遺物の紹介（続）……（畑　中　英　二）
－窯詰めの方法の復元について－

森瓦窯再考　－「田原道をめぐる二つの地域」補遺－……（重　岡　　卓）

近江式装飾文よりみた小形板碑の年代……（兼　康　保　明）

１９９８．３

財団法人滋賀県文化財保護協会

観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例

－蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査－

辻川　哲朗・山中　　繁

1　はじめに

観音寺山（繖山）は、湖東平野に散在する独立山塊の一つである。標高約432.7mをはかる最高所から麓にいたる斜面には、戦国時代に近江南半を掌握した豪族六角氏の居城として著名な観音寺城に関わる平坦面が一千ヵ所以上散在し、全山をほぼ城域としている。

観音寺山の南麓に石寺集落がある。集落の背後には、観音寺山から支尾根群が派生し、それらが形成する谷筋には小規模な水流が流下している。いずれも普段なら水脈の途切れがちな小川であるものの、一定量以上の降雨があれば土石流が発生し、石寺集落に幾度となく被害を及ぼしてきた。そのため、これらの小河川群を対象とし、総合治山事業の一環として砂防工事が計画されたが、工事予定地は先述した観音寺城跡の範囲を包含するため、平成９年度から事前発掘調査が実施されることとなった。

発掘調査担当となった辻川は、発掘現場を見学にきた地元の方から、開口する横穴式石室墳が周辺に存在することを教えていただいた。早速、現地に案内していただき、実見したところ、極めて残存状態の良好な横穴式石室墳であることが分かった。

この古墳は、『平成７年度　滋賀県遺跡地図』(滋賀県教育委員会1996。以下本書を『県遺跡地図』と略称する）において「谷川筋古墳群」として記載されている古墳群に含まれ、地図上でのプロットと「横穴式石室墳５基」という記載がある。また、安土町教育委員会（以下、町教委と略称する）による分布調査の結果では、古墳3基が確認されている（石橋1987)。しかし、これらの記述以上の資料化は従来なされていなかった。そこで、実測調査を行い、資料化を図ることは、当該地域の後期古墳の動態を知る上で微弱なりとも寄与するところがあると考え、石室・墳丘の実測調査とあわせて周辺の分布調査を実施した。実測調査及び分布調査は発掘調査期間中とそれ以降の休日を利用して行った。(1)

本稿は、この実測調査及び分布調査の成果を報告することを目的としたものである。なお、本稿は山中（仏教大学学生）が第2章を、それ以外を辻川が執筆し、辻川が編集した。

2　分布調査の結果（第１・２図）

(1)　調査の対象

今回、分布調査を行ったのは、開口する横穴式石室を含む谷川筋古墳群である。その周辺には、後述するようにいくつかの古墳群が存在するが、これらについては、遺跡地図の記載を参考とし、補助的な分布調査にとどまった。そのため、今回は、谷川筋古墳群に対象を絞って報告する。

(2)　谷川筋古墳群

〈立　地〉

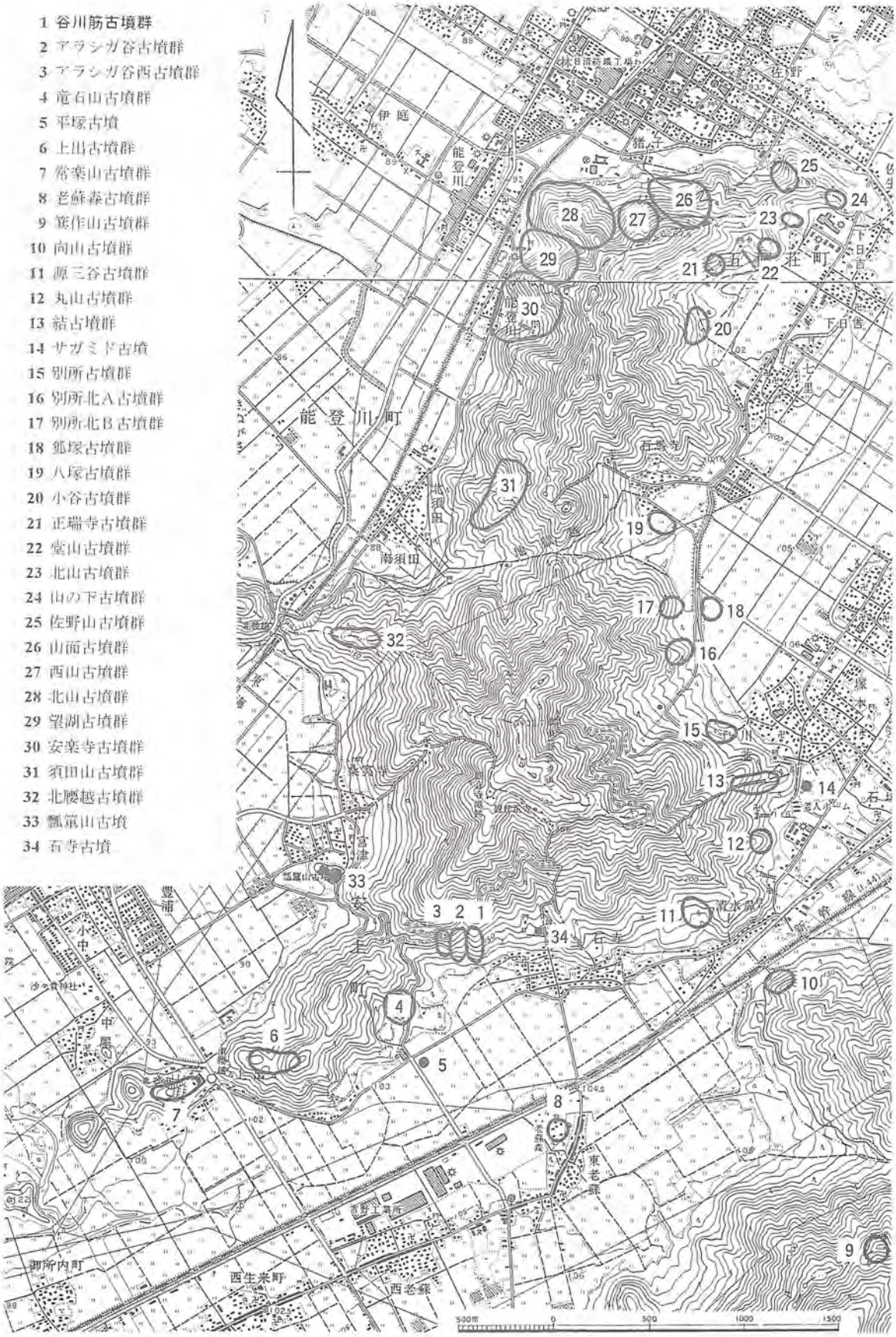
谷川筋古墳群は、蒲生郡安土町石寺地先にある。

観音寺山は四方八方に支尾根を派生させているが、このうち南方へ派生する一支尾根の稜線上に谷川筋古墳群は立地する。石寺集落からみれば、集落のほぼ西端にあたる山林の中に位置することになる。観音寺山全域には、観音寺城に関連すると考えられる平坦面が多数存在する。谷川筋古墳群の所在する付近にも、その西北側の谷斜面には平坦面や石垣状遺構を確認できる。さらに古墳群の乗る尾根の東側は、平成９年度に発掘調査を実施した谷筋があり、その各所には同様の平坦面と石垣状遺構を認めることができた。ただし、古墳群の位置する尾根線上には、明確な平坦面は確認できない。当該地域の古墳分布を考えるうえで、観音寺城の築造による古墳群の破壊は、考慮に入れるべき問題と考える。

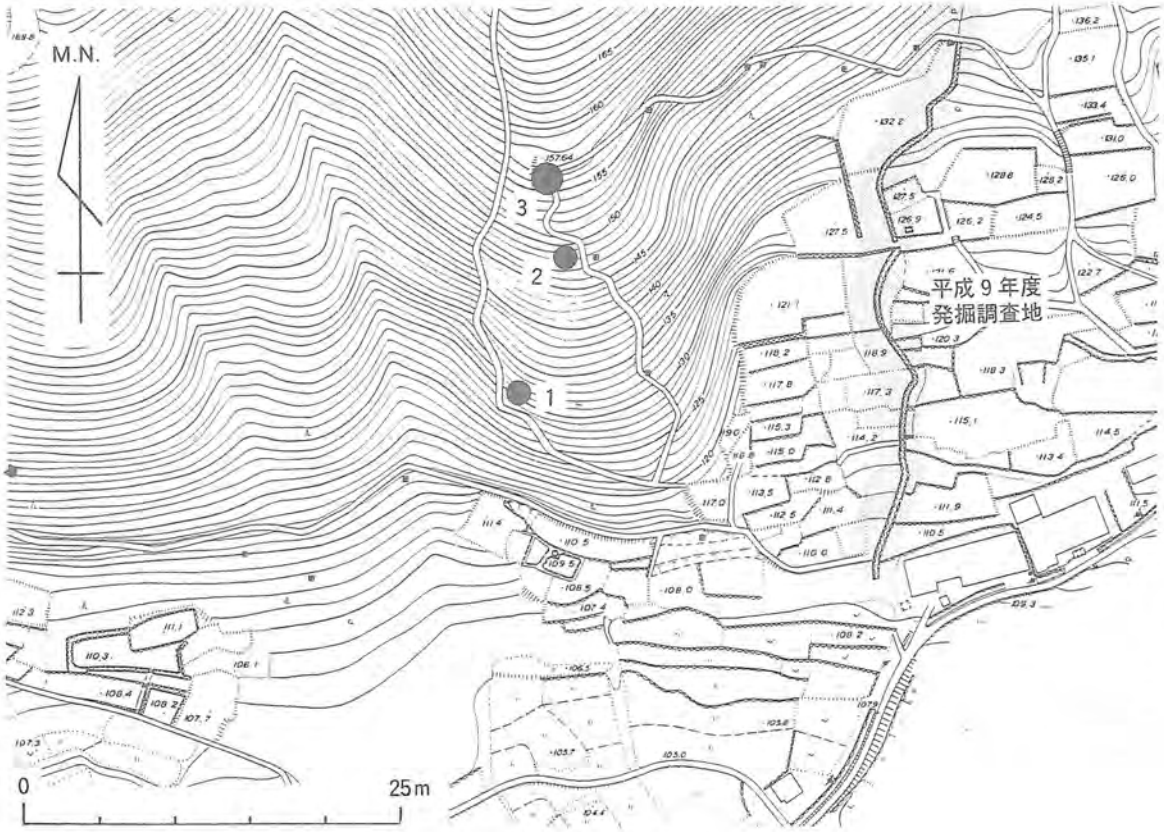
〈群構成〉

谷川筋古墳群の分布については、先述したとおり、『県遺跡地図』に「横穴式石室墳５基」という記述がある。また、町教委による分布調査では、古墳３基が確認され、分布図が提示されている。今回実施した分布調査では、少なくとも３基の古墳を確認す

1 谷川筋古墳群
2 アラシガ谷古墳群
3 アラシガ谷西古墳群
4 竜石山古墳群
5 平塚古墳
6 上出古墳群
7 常楽山古墳群
8 老蘇森古墳群
9 箕作山古墳群
10 向山古墳群
11 源三谷古墳群
12 丸山古墳群
13 結古墳群
14 サガミド古墳
15 別所古墳群
16 別所北A古墳群
17 別所北B古墳群
18 狐塚古墳群
19 八塚古墳群
20 小谷古墳群
21 正瑞寺古墳群
22 堂山古墳群
23 北山古墳群
24 山の下古墳群
25 佐野山古墳群
26 山面古墳群
27 西山古墳群
28 北山古墳群
29 望湖古墳群
30 安楽寺古墳群
31 須田山古墳群
32 北腰越古墳群
33 瓢箪山古墳
34 石寺古墳



第1図　観音寺山周辺の古墳群（S＝1/3,000）



第２図　谷川筋古墳群分布図（S＝1/500）

ることができた。[2]

以下、記述の便をはかるため、これら３基の古墳に対して暫定的に番号を振っておきたい。今回、石室実測調査を実施した古墳を１号墳とし、それから上方へ向けて２・３号墳と仮称する。

〈１号墳〉

１号墳の詳細については、後述するので、ここでは省略したい。

〈２号墳〉

１号墳より、直線距離で北東方向に約30ｍ程度登ったところに位置する。１号墳との標高差は約15ｍ程度をはかり、ほぼ尾根線上に立地することになる。墳丘封土は、ほとんど流出しており、横穴式石室と思われる石材が露出している。墳丘形態は判然としないが、周囲よりわずかに高まる部分があり、その範囲は直径にして約７ｍ程度であった。

石室は残存状態が悪く、石室の開口方向・規模等については知り得なかった。しかし、露出した２ｍ大に巨石の下部に人頭大の石材が確認できる箇所があり、露出した巨石が天井石で、その下部の石材が側壁に相当すると思われた。

表土上からの観察では、外表施設や遺物を確認することはできなかった。

〈３号墳〉

２号墳から直線距離で北方向に約10ｍ程度登った地点に位置する。２号墳との標高差は約５ｍ程度をはかり、ほぼ尾根線上に立地する。

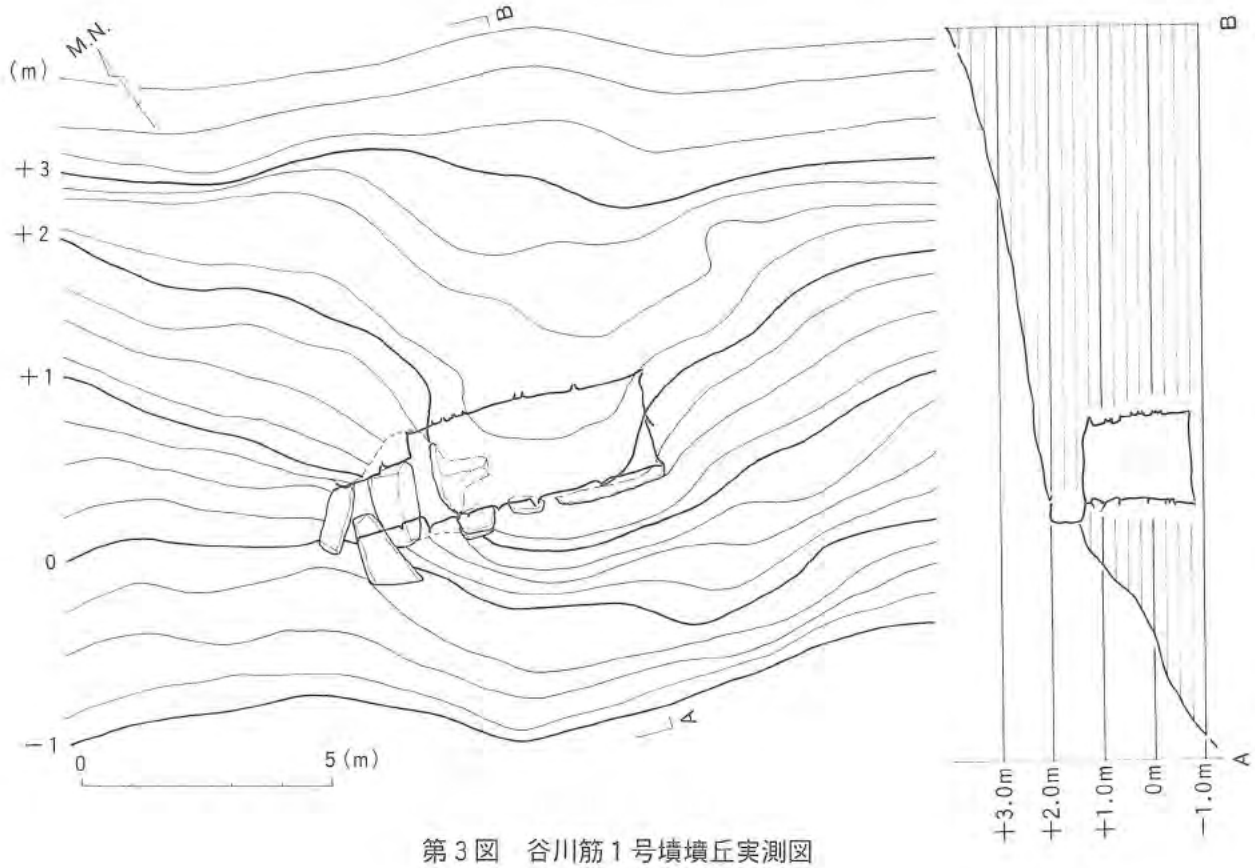
墳丘封土はほとんど流出している。横穴式石室の天井石及び側壁が露出していた。墳丘の規模・形状については判然としない。

石室の残存状態は２号墳に比してやや良好である。左右側壁の一部を確認することができた。石室は西側へ開口すると思われるが、羨道部は流入土の堆積によって確認できない。玄室にも流入土が堆積するが、確認できる左右側壁から玄室幅を知ることができる。それによるならば、玄室幅約1.6ｍをはかる。また、玄室長については、2.8ｍ以上を計測する。天井石は２ｍ大のものが2石確認できた。

表土上からの観察では、外表施設及び遺物を確認することはできなかった。

(3)　小　結

以上が、谷川筋古墳群にかかる分布調査結果であ



第３図　谷川筋１号墳墳丘実測図

る。ここで、その要点を箇条書きでまとめておきたい。

- 谷川筋古墳群は、3基からなる古墳群である。
- いずれも墳形・規模については判然としない。
- 古墳群の立地は、尾根稜線上及び稜線からやや西側へ下がった斜面にあたる。
- いずれも横穴式石室を埋葬主体とする。

3　谷川筋１号墳の実測調査

(1)　墳丘（第３図）

〈墳丘規模・形態〉

墳丘については、平板測量によって、１／50縮尺の平面図・断面図を作成した。ここでは、この墳丘測量図をもとに、抽出できる情報をまとめておきたい。

墳丘は、ほぼ北から南へむけてのびる尾根の西側斜面に位置する。現状では、天井石の一部が地表に露呈しており、それら付近を中心にわずかな盛り上がりが認められるだけで、封土の大半は流出しているようである。石室の山側は緩斜面が続き、明確な掘割墳等の区画施設は現状において確認できなかった。石室付近のわずかな盛り上がりは、東西約９ｍ・南北約７ｍ程度であり、これをもって墳丘規模の最小値を推測することは可能である。しかしながら、墳形については確証を得ない。

墳丘の外表施設については、葺石・埴輪のいずれも確認できなかった。

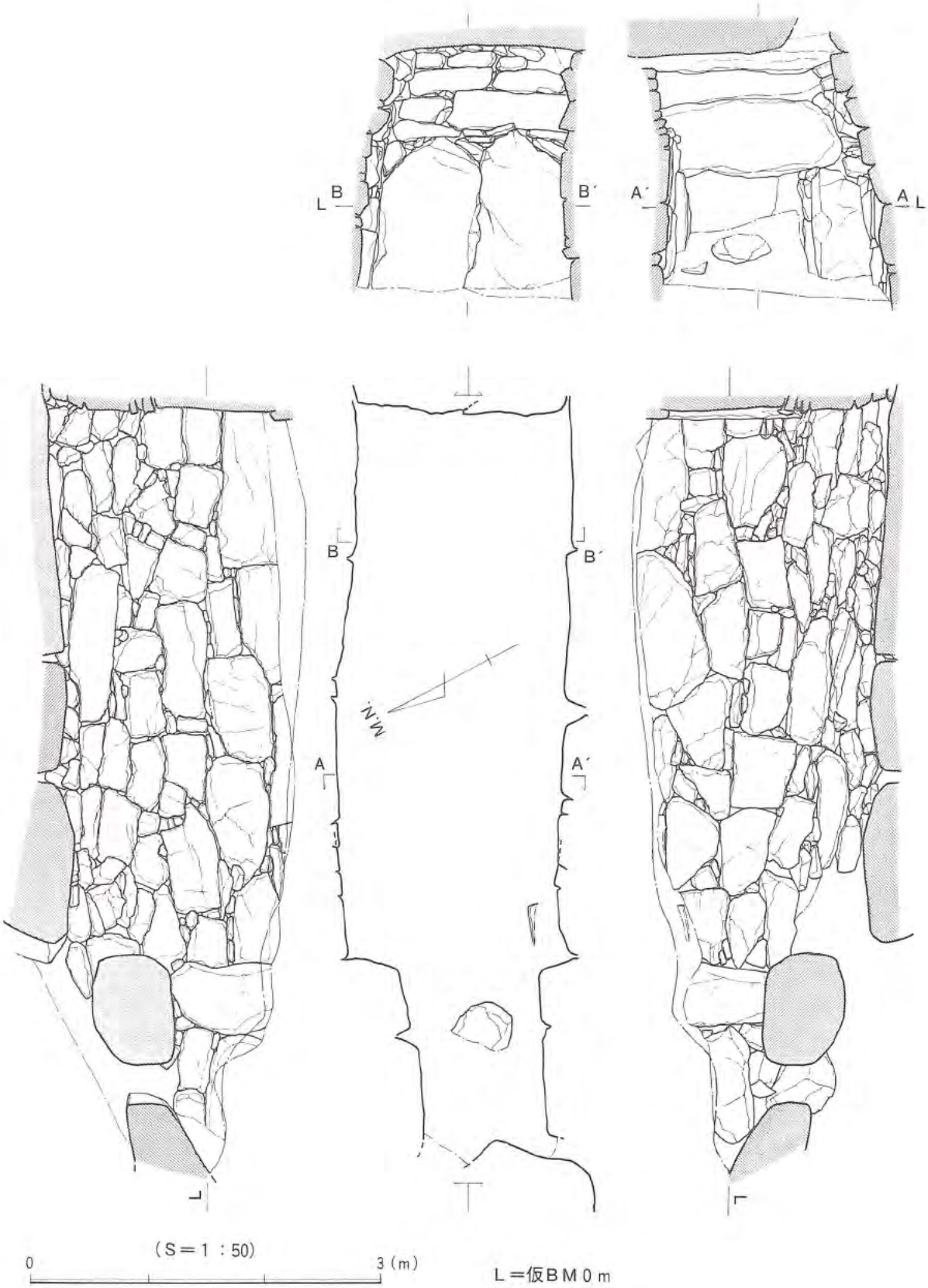
実測調査中、石室内及び古墳周辺での遺物分布に留意したが、全く確認できなかった。

(2)　石室（第４図）

〈石室の現状〉

谷川筋１号墳の埋葬主体は、全長約6.5ｍをはかる両袖の横穴式石室である。石室の長軸方位は、磁北に対してＮ－27°－Ｗ程度振れ、西方向に開口する。玄室床面は、現状での墳頂部より3.25ｍ下方にある。

石室は、前壁部及び左側壁部・羨門天井石・奥壁部で石材が抜き取られ、あるいは移動されている。とりわけ、前壁部及び左側壁部の石材除去による間隙は大きく、ここから石室内へ進入することができる。さらに、石室床面は羨道部から奥壁部へむけて傾斜していることから、これらの間隙から石室内へ



第4図　谷川筋1号墳石室実測図

土砂が進入し堆積しており、本来の床面は現状で確認できない。

以下、石室構造について、項目を分けて記述していきたい。

〈玄　室〉

玄室の平面は長方形を呈する。規模は、玄室長約4.9m（右側壁）・4.9m（左側壁）、玄室幅1.9m（奥壁）・1.9m（玄門部）、高さ2.6m以上（奥壁）・1.8m以上（玄門部）をはかる。壁面を構成する石材は、花崗岩の角礫が主体である。壁面に顔料等の塗布、石材間への粘土等の充填は認められなかった。

玄門部の基底には、高さ0.86m・幅0.6mをはかる石材を縦位に据えている。その上部に高さ0.7m・幅1.6m程度の石材を架構し、前壁とする。この上部には、玄室天井石との間に空間があり、さらに1石が本来存在したと思われる。玄門部は、床面で幅1.2m、天井部で幅1.0m・高さ0.8mをはかる。玄門部の床面は羨道からの流入土が堆積しており、玄門床面の構造は不明である。

左右側壁の基底部には、高さ0.5m前後・幅1.0m前後の偏平な石材を横位置に並置している。その上位には、基底石よりやや小振りの石材を積み上げている。この石材の横積み単位については、右側壁の場合6段、左側壁の場合6段の目地が認められた。右側壁は壁面上方がやや張り出し気味になるが、左側壁ではほとんど直線的に積み上げられており、旧状を残している。

奥壁の基底部には、高さ1.26m・幅0.9m程度の大きな石材を2石縦積みしている。その上位には、小石材を3段に横積みする。奥壁についても、ほとんど直線的に積み上げられており、持ち送りは認められない。

玄室には3枚の天井石がほぼ水平に架構されている。天井部の長さは4.7m前後、幅は奥壁部で1.54m・前壁部で1.5mをはかる。

〈羨　道〉

長さは、右側壁の場合袖部基底石から羨門側基底石端まで約1.4m、左側壁の場合袖部基底石から羨門側基底石端まで約1.5mをはかるが、それ以上に伸びることは間違いない。幅については、袖部で約1.2m、現状での玄門側端で1.08m前後をはかり、やや西南方向に振って伸びている。羨門部の床面には流入土が堆積しており、本来の床面はさらに下方になると思われる。

羨道の左右側壁は現状で1石程度が見えるだけである。玄室の壁面と同様に、石材を横位に積んでいる。

羨道の天井石は、現状で3石が確認できる。そのうち現位置をとどめているのは、先述した最も玄門部よりの1石のみであり、それより羨門側の2石については、いずれも現位置をとどめていない。側壁の遺存レベルからみて、天井石はほぼ水平に架設されていたと思われる。

(3)　小　結

以上、谷川筋1号墳の実測調査について記述してきた。節を終えるにあたって、調査成果をまとめておきたい。

- 墳丘は封土が著しく流出しており、墳丘規模・形態については判然としない。
- 埋葬施設は両袖の横穴式石室である。
- 玄室平面形は長方形を呈する。
- 石室の天井縦断部は平天井で、前壁を有する。
- 玄室の横断部形態は、ほぼ長方形で顕著な持ち送りは認められない。
- 奥壁には、比較的大型の石材を立位に据える。
- 玄門部は石材を左右に1石づつ立位に据え、上位に石材1石を架設する。

4　谷川筋1号墳の検討から

以上、今回の実測・分布調査の成果について記述を進めてきた。ここで報告を終えるにあたって、今回の調査から派生すると思われる若干の問題点を指摘するとともに、あわせて、二三の考察を巡らしてみたい。

(1)　谷川筋1号墳の特徴

谷川筋1号墳の石室の特徴については、前章の小結において既に述べたところである。ここでは、以下に進める検討の前提として、再度確認しておく。

- 埋葬施設は両袖の横穴式石室である。
- 玄室平面形は長方形を呈する。
- 玄室・羨道の天井縦断部は平天井で、前壁を有

する。

- 玄室の縦横断部形態は、いずれもほぼ長方形で顕著な持ち送りは認められない。
- 玄門部は、石材を左右に1石づつ立位に据え、上位に石材1石を架設する。

かかる特徴は、いわゆる「畿内型横穴式石室」のそれと共通する部分が多く、谷川筋1号墳の石室も「畿内型横穴式石室」の範疇で捉えるのが妥当であろうと思われる。(3)

(2) 近江における「畿内型横穴式石室」

さて、当該地域を含む近江地域における横穴式石室の展開過程については、既に先学により業績が積み上げられている。ここでは、田中勝弘氏による論考(田中1993)に基づき、その概略をまとめておく。

田中氏によれば、近江地域における「畿内型横穴式石室」の導入と展開過程は、以下のように大きく4つの段階に分けることができる。

(1段階)　首長墓と思われる大型古墳ではMT15型式期前後に「畿内型横穴式石室」が受容される。代表例としては、野洲町越前塚古墳をあげることできる。この段階と並行するか、やや先行して小型古墳には玄室平面形態が正方形を呈し、窮隆頂持ち送り式形態をとる九州系の石室が導入されている。

(2段階)　TK10型式期に相当する。前段階に引き続いて首長墓クラスの大型古墳には「畿内型横穴式石室」が採用されるが、石室形態には近江的な特徴が見出せるようになる。

この段階には、いわゆる階段状石室をもつ群集墳が湖東地域に出現している。「畿内型横穴式石室」からなる群集墳の形成が開始されている可能性がある。

(3段階)　MT85～TK43型式期に相当する。首長墓には「畿内型横穴式石室」が採用されるが、単独墳から群集墳中の盟主墳へと存在形態が変化する。同型横穴式石室を採用する群集墳が爆発的に増加する。

(4段階)　群集墳はTK209型式期には群形成は、終末期古墳の系譜を引く少数例を残して、終焉を迎える。

谷川筋1号墳例を「畿内型横穴式石室」とみるならば、上述した諸段階のなかでは、3段階めの「畿内型横穴式石室」の拡散の一例として位置づけることができ、大まかには6世紀後半にその所属時期を想定することができる。

ここでは、こうした従来の枠組みのなかでの理解を深めるためにも、石室構造を検討してみたい。というのは、かかる拡散段階以降の「畿内型横穴式石室」の変遷過程については、その導入段階の様相にたいする注目度合に比して、長く看過されがちであったと考えるからである。

(3) 奥壁構築方法の検討

〈検討の方法〉

「畿内型横穴式石室」の石室構造面で、時間的変化を表すものとして考えられているのは、石材法量・石材の積み方であろう。とりわけ、石材の法量については、大型化を指向することが指摘されている。大型化傾向を視覚的に捉えるには、石室壁面の積み上げ段数減少によることが多い。本稿では、この前提にたち、特に奥壁の構築方法に焦点を絞って、若干の検討を加えたい。

谷川筋1号墳の奥壁については、先述したとおり、最下段に比較的大型の石材を2石立位に据え、その上位に小ぶりな石材を3段に横積みすることで、構築している。一方、左右側壁については、扁平な石材を横積みし5段程度の目地が通り、奥壁と側壁では積み上げる段数が異なることになる。このように奥壁の最下段に大型石材を据える構築方法(4)は、いつ、いかように出現したのであろうか。このような特徴は、「畿内型横穴式石室」が成立したであろう大和地域を含む「畿内」地域では基本的に認められないものである。

滋賀県内ー特に、当該地域を含む湖東地域の例を対象として、検討してみたい。

〈奥壁構築法に見る二相〉

最初に、上述した奥壁の構築方法の点から以下の2類に大別する。

1類：奥壁の構築は、偏平な石材を横積みすることにより行うもの。玄室左右の側壁の積み上げ段数がほぼ共通する。

2類：最下段に大型石材を1～2石程度据え、その上位に偏平な小型石材を数段横積みすることで奥壁を構築するもの。左右側壁の積み上げ段数と奥壁

のそれとが整合しない。

〈具体例の検討〉

次に、具体例を検討していきたい。本来ならば、当該地域周辺の例を検索すべきところであるが、伴出遺物が知られている例がほとんどなく、あるいはその具体相が公表されている例が少ないため、少しく検索の視野を広げることにする。

最初に観音寺山周辺の例を検索しよう。

谷川筋古墳群より東方にある五個荘町丸山古墳群（江南1965）の場合、羨道がスロープ状を呈し、階段式石室との区別が問題となる１号墳例を除くと、右片袖の２号墳では、図上からは１類と読み取れる。同じく同町正瑞寺古墳（林1993）も２類である。

猪子山古墳群（山本1991）では、能登川町教育委員会によって分布調査と実測調査が実施されており、石室実測図が提示されている。そのうち、奥壁の様相が判明する例のいずれもが２類の奥壁である。

野洲町域では、大岩山周辺に横穴式石室を採用した一連の首長墓系譜を含む大岩山古墳群が認められる。これらについては、近年、史跡整備に伴う発掘調査が実施されており、その成果を待って再検討したいが、周辺の宮山１号墳・同２号墳はいずれも奥壁石材が大型化するものの、１類に相当すると思われる。

一方、大岩山古墳群とは、鏡山丘陵を挟んで東方に位置する蒲生郡竜王町には、鏡山丘陵・雪野山西麓に顕著な後期古墳の分布を見ることができる。とりわけ、竜王町薬師岩屋古墳・薬師岩の前オーゴ古墳は、前者から後者へ続く首長墓系譜として捉えることができる。岩屋古墳・岩の前オーゴ古墳いずれの横穴式石室も２類の奥壁構築法を採用する。さらに、雪野山丘陵に所在する竜王寺北支群では、１号墳に２類の横穴式石室があり、同東支群５号墳でも２類の横穴式石室を確認することができる。北支群１号墳は、発掘調査が実施されており、須恵器の出土が知られ、６世紀後葉に位置づけられている（丸山1987）。

〈奥壁構築法のあり方〉

このように見ていくと、少なくとも湖東地域ー野洲町域・蒲生郡域・神崎郡域では、「畿内型横穴式石室」の奥壁構築方法に１・２類の両者が確認できることになる。とりわけ、蒲生郡域の竜王町では、２類が主体的であるようだ。その存続時期については、いまだ確たる資料に乏しいものの、竜王寺北支群１号墳例を参考にするならば、６世紀でも後半のうちには出現していることを知り得る。岩屋古墳の造営を契機として、そこからの拡散を想定すれば、さらに出現時期が遡上する可能性を残す。

観音寺山周辺では、１類・２類が錯綜している。その時間的関係は判然としない。

(4) 小　結

奥壁構築法２類が基本的に「畿内」地域では、認められないことは、既に述べたところである。そうであるならば、その出現の背景には、一つに自立的な変化、もう一つは外部的な影響による変化[5]の２つの選択肢を設定することができる。

ここでは、いずれの選択肢が妥当であるかを決することは、再考を期して保留し、奥壁構築法のバリエーションからみると、近江地域において導入された「畿内型横穴式石室」の展開過程の多様なあり方、特に奥壁構築方法を指標とした場合、少なくとも技術の流れに複数のバリエーションを想定できるという点を確認するにとどめておきたい[6]。

4　おわりに

以上、谷川筋古墳群の分布調査と同１号墳の実測調査成果の報告とそれより派生する若干の問題点の検討を行った。

当該地域は、後期古墳を含めて、古墳が多数集中する地域である。その研究は該当地域のみならず、さらに大きなレベルで進められるべきであるが、今回は、筆者の力量不足により、中途半端な結果に終わった。この点については、さらに分布調査・実測調査を進めたうえで、再考を期したい。

末筆ながら、実測調査・分布調査には、山縣孝式・山本由里子の両氏から多大なる協力を得た。記して謝意を表したい。

また、本稿をまとめるにあたっては、細川修平氏からの教示に多くを負っている。その事実を記して、謝意を表したい。また、以下の方々からは、様々な形でご指導を得た。厚くお礼申し上げる次第である。

畑中英二・大道和人・瀬口真司・重岡　卓
（敬称略・順不同）

註

(1) 実測調査及び分布調査を実施するにあたっては、地元石寺区の方々から、実測調査の快諾を得た。厚くお礼申し上げる次第である。

(2) ただし、問題が残るのは、町教委によって提示された分布図と、今回の分布調査の結果確認された古墳の分布状況とが整合しないという点である。すなわち、町教委の分布図によると、谷川筋古墳群の分布は、平成9年度に発掘調査を行った谷筋の東側斜面に位置することになる。しかるに、今回の分布調査においては、町教委による分布地点から西側の尾根上及びその西側斜面に分布を確認している。この地点は、町教委による分布図には全くドットが落とされていない。町教委による分布地点を今回改めて踏査したが、古墳の痕跡は確認できなかった。

(3) 本稿における「畿内型横穴式石室」概念は、土生田純之氏のそれを参考にしている（土生田1994）。

(4) いわゆる「鏡石」に相当するが、今回は１石に限らず、２石の場合も含めている。

(5) 近江地域に隣接する美濃地域においては、６世紀後半代に、「畿内型横穴式石室」に奥壁構築法２類が確認できるようになるという。その背景として、成瀬正勝氏は西三河地域との関係を指摘する（成瀬1992）。

近江地域ーとくに湖東地域における「畿内型横穴式石室」を含めた横穴式石室の展開過程を考えるうえで、伊勢湾沿岸地域との交流を評価する細川修平氏の見解（細川1996）はさらに検討されるべきと考える。

(6) 近江における「畿内型横穴式石室」の展開過程については、稿を改めて検討したい。

文献

江南　洋（1965）「丸山古墳群」：『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日本国有鉄道

水野正好（1965）「竜石山古墳群」：『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日本国有鉄道

田中勝弘（1993）「近江における横穴式石室の受容と展開」：『紀要　第1号』滋賀県立安土城考古博物館

滋賀県教育委員会（1996）『平成7年度　滋賀県遺跡地図』

石橋政嗣（1987）『安土町内遺跡分布調査報告書』（安土町文化財調査報告第6集）安土町教育委員会

土生田純之（1994）「畿内型横穴式石室の成立と伝播」：『大和王権と交流の諸相』名著出版

林　博通（1993）「正端寺古墳群」：『五個荘町史第四巻(1)考古・美術工芸』五個荘町役場

細川修平（1996）「古墳からみた近江の渡来人」：『近江・河内・大和の渡来人』㈶滋賀県文化財保護協会

成瀬正勝（1994）「美濃の横穴式石室」：美濃古墳文化研究会『美濃の後期古墳』

丸山竜平（1987）「中世以前の竜王町」：竜王町史編纂室『竜王町史（上巻）』竜王町役場

山本一博（1991）『能登川町埋蔵文化財調査報告書第19集』能登川町教育委員会

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年３月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は２段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。　（K．O）

平成10年３月

紀　要　第１１号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本　冨士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923　K
滋賀県文化財
保護協会蔵書印　440